第 2 巻　編集後記

恵寿総合病院医学雑誌の第 2 巻を無事発行する事ができました。創刊号の論文数が 12 編で今回が 19 編でした。論文数だけで評価する事は慎むべきだとは言え、2 年目のジンクスが危惧されただけに予想以上の結果で喜んでいます。また、内外から聞こえてくる評判も良く、リップサービスなのだろうと思いながらも、褒められるとやはり嬉しいものです。これも一重に川村編集長の熱意と、それに応えて頂いた執筆者の方々の努力の賜物と思い感謝しています。次回もこのペースが持続するようなら年 2 回の発刊も夢ではないかも知れません。次巻編集に備えて、編集委員会や査読体制の整備など組織的充実が必要になりそうです。

さて、本巻の総説では、宮本先生には糖尿病における循環型医療連携（二人主治医制）の推進と恵寿総合病院における地域医療連携態勢を、川北先生にはリハビリテーション診断学を、真智先生には緑膿菌感染と薬剤耐性を執筆いただきました。いずれもメッセージ性の高いものであり、読み応えがあります。特に当院職員には全員が是非一読するようにお勧めします。また、原著・症例報告・短報の著者をみると、医師ばかりではなくメディカルスタッフの多いことが目を引きます。昨今のチーム医療の浸透を反映しているものと思われ、力強さを感じます。この多職種連携の輪が更に大きくなり、かつ多様化していくことを願っています。ところで、医師にとって症例報告は論文執筆の登龍門といわれています。医師に限らず、若いうちに論文を書くことに慣れておくことの意義は大きいと思います。当院の臨床研修センターでは、2 年間で修めるべき研修内容の中に年 1 回以上の学会や研究会での発表を課し、発表症例の論文化を奨励しています。その効果か、ここ数年で学会発表数が右肩上がりに増加しています。論文数もこれに追随して行くことを期待しています。指導医の皆さんには研修医に症例報告を書くように積極的に働きかけ、適切な指導をお願い致します。また、より多くの指導医が自ら執筆していただくよう期待しています。

今後とも本医学雑誌が質量ともに更に充実するように皆様のご理解とご支援をお願いします。また、読者の皆様からのご感想、ご要望などがあれば是非編集部までお寄せ頂きますようお願い致します。

編集顧問　東　壮太郎